秋の伝道礼拝第1回（10月13日）

選ばれた理由

小海　基

申命記第7章6～8節
ペトロの手紙Ⅰ第2章9～10節

今回の伝道礼拝のテーマ「神の選び」について

今回の伝道礼拝は、「神の選び」について聖書から聴くシリーズです。「選び」「召命」は、ドイツ語でベルーフ、英語でコーリングですが単に選ばれたことではなく、「天職」神様から与えられた職業も意味します。

しかし聖書は自分の好みや得意分野で選ぶものでなく、神様が選ばれるものだと語っています。

キリスト教の歴史の中で、神の救いへの選びは「予定論」として大きな論争を呼び、教派分裂も引き起こしてきました。神様が私たちを何か価値があるから選ばれたのではなく、しかし救いの大きなご計画の中でキリストの十字架という大きな犠牲さえも厭わず選ばれ用いられるという「神の選び」の不思議さ、大きさを私たちは知る必要があります。あなたにもその「選び」、招く声が響いているのだという事に触れる伝道礼拝です。

キリスト教は決断の宗教です。私たちがそれぞれ主体的に決断し選択していく信仰です。しかし本当に深いところ、真実において私たちは受身でしかあり得ません。私たちは「神様から選ばれている」という真実に気づいてこそ、真に決断できるのです。

今回の伝道礼拝のテーマはここにあります。神様がわたしたちを選んでくださった「神の選び」という問題です。

申命記は旧約聖書の中の、正典中の正典

申命記という書物は、旧約聖書の中の正典中の正典に位置づけられ、信仰の中心を言いあらわしている書物です。

エジプトで奴隷であったイスラエルの民が40年の出エジプトの旅路の果てに、ヨルダン川を渡ると約束の地に入れる手前で、これまでのエジプトでの奴隷の生活と全く違う「自由な」「神の民」として生きていくことが出来るという所で、ヨルダン川を一緒に渡ることは許されていないモーセがヨルダン川を渡って神の民として生きていくとはどういうことかを確認している言葉が書きとめられています。

（6節）

あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。

しかし思い上がってはいけません。これは「競争に勝った」と言うようなたぐいの「選び」とは違うのです。

（7節）

主があなたたちを選ばれたのは、数は少なく、むしろ貧弱でエジプトにおいて踏みにじられ続けた最低限の奴隷の民であった。特別優秀なわけでもなかった。

当時のエジプトは巨大なピラミッドが建てられ、巨大な王宮、神殿がそびえ建っていた、世界一の文明国家であった。エジプトの奴隷でいた方が毎日肉鍋を食べて腹一杯で暮らすことができた。

性格が良かったわけでもなく、40年間の砂漠の旅路ですぐに音を上げ、ひもじい、渇いたと文句を言い、なぜエジプトから自分たちを連れ出したのかとモーセたちをつるし上げ続け、殺そうとさえしました。「貧弱」としか表現しようのない平凡で頑固で忍耐力もない民だった。

（8節）

ただ、神様はあなたたちを、あなたを見放さなかった。これが神の民とされたということです。神様があなたを選ばれた。あなたが神様を選んだのではなくて主の愛のゆえにあなたを選ばれた。

新約聖書で確認されている、「受け身の事実」

新約聖書（ペトロの手紙Ⅰの2

章9～10節）で確認されているのもこの「受身の事実」です。

信仰という世界は、まさにこの「受身」の「選ばれている」という事実、真実を受け入れることを意味します。全く奇跡のように選ばれたという真実を受け入れることを意味します。

カール・バルトの言い方でいえば、私たち人間はまさに（その間で選ぶことができるような）二つあるいは三つの可能性の前に立つのではなく、むしろひとつの、ただひとつの、与えられた可能性を選ぶのです。言い換えれば、選ばれてある（いる）ことを選ぶのです。そのように選ぶということが、イエス・キリストの名を選ぶということだというのです。宗教改革者たちは人間に対してこの決断を人間の自由に訴え求めたのです。

「予定」とは、神の永遠の決議の中での選びです。キリストの救いの出来事の中に、自分が選ばれていることを認めざるを得ないということです。私たちが選ばれていることを認めて、私たちが選ぶことです。

さて、ここで神様から「選ばれた」という事を受け入れた者が陥りやすいのは、神様が見放さず、この「貧弱な者を敢えて選んだ」という神様の側の理由を忘れて、横を向き、自分は選ばれたけれど、選ばれない人もいるといった思い上がりに走りやすいという問題です。神学の予定論でまるで「選ばれる者」と「選ばれない者」がいる。「救われる者」と「救われない者」がいるというような誤解です。こういう考えは「二重予定」というのですが、「イエス・キリストの救いの選び」が、十字架の救いの出来事に関わっているという深刻な真実にかかっているのをよく見ていないから起こるのです。

神があなたを選ぶのに、あなたの側に理由があるのではなくて、イエス・キリストが十字架にかかるほどの者として選ばれたという意味です。

一体、イエス・キリストの十字架の救いが届いていないという人がいるでしょうか？　強盗バラバや、銀貨30枚で裏切ったイスカリオテのユダ、三度もイエスを知らないと否んだペトロにも十字架の救いは届いているのです。

「選ばれていない」、「救われない」という私たち罪人の重荷を、イエスは十字架で負ってくださっているのです。

「二重予定」についての、オランダでの論争

今、ガザやレバノンに無差別攻撃を続けているネタニヤフ政権は「選ばれている民」ということを全く誤解しています。力づくで「選ばれた民」というポジションを人間が維持できるものではありません。イスラエルがミサイルを撃ち込んでいる民も、救われる民として選ばれていることを知っている民、それが「選ばれた民」ということなのです。

この「二重予定」についてはオランダで論争が起こりました。宗教改革のカルヴァンの後継者としてヤーコブ・アルミニウス（一五六〇―一六〇九）は、一五八一年にジュネーヴに行き神学を修め、さらにバーゼルに留学、アムステルダムで牧師となります。

ディルク・コールンヘルトという著名な文筆家の予定論への疑義に対して、教会が解決のためにアルミニウスに研究を委嘱しました。しかしアルミニウス自身が予定論に否定的になってしまい、論争が巻き起こりました。私はアルミニウスの立場に近いです。

（ペトロの手紙Ⅰの2章9～10節）

しかし、あなたがたは選ばれた民、神のものとなった民です。

神様の救いの大きな計画の中であなたを選ばれたのです。これらの恵みに押し出されて神の御業に参加出来ますようにお導きください。

（出席32名。文責・編集委員会。要約担当・菅野静恵）